

# 別子銅山社宅街（鹿森・東平）における昭和の生活史

竹原 信也\*

Life in a Copper-Mining Town: Studies on Oral History in Besshi Area, Niihama, Japan

Shinya TAKEHARA

This paper examines the lives of people residing around the Besshi Copper Mine during the Showa Period. It explores the lives in the corporate housing districts of Tounai and Shikamori through the study of conversations recorded as a part of Besshi Okando Project, a voluntary project to record and enliven the oral history and “memories” of people who lived in the areas surrounding the mine, which closed in 1973.

## 1. はじめに

本報告は、2010 年度に行われた「別子往還道プロジェクト～記憶の継承・地域の絆～」事業の概要を紹介するとともに、事業での記録をもとに、昭和期における別子銅山を中心とした新居浜地域<sup>1)</sup>での生活文化を記述するものである。特に、別子銅山の社宅街、とりわけ山間部に位置した東平（とうなる）地域と鹿森（しかもり）社宅での生活文化に着目し、その様相を記述する。

報告者の問題意識と本報告の必要性は、(1) 社宅街の研究と (2) 産業遺産を活用したまちづくりから説明される。

(1) 明治以降、全国各地の炭坑、鉱山の近代化が進められた。それに付随して社宅街も形成されてきた。近年、この社宅街の形成と変遷を明らかにする建築史的アプローチからの研究が積極的に進められ、その先進性が再評価されるに至っている（社宅研究会、2009）。その一方で、別子銅山は閉山しており、その社宅街も、一部を除いて存在していない。特に山間部の社宅街は閉山後の植林等により消滅している。また、社宅街で生活していた人々も高齢化が進んでいる。それゆえ、居住経験者の証言を記録し、生活文化を明らかにしていくことは社宅街の研究にとって重要であると考えられる。

(2) 近年、閉山後の炭坑や鉱山が「産業遺産やまちづくりのテーマとして、とらえなおされている」（西牟田、2010、p.219）。新居浜市においても、別子銅山を産業遺産として捉え、いかに活用していくかが課題となっており、様々な取り組みがなされている。この点、産業遺産にまつわる人々の記憶や社宅街での

生活について証言を記録していくことは、産業遺産を活用したまちづくりにおいても一資料として有益であると考えられる。

以上の問題意識のもと、報告者は「別子往還道プロジェクト～記憶の継承・地域の絆～」事業に参加し、撮影と録音を行った。そして、テープ起こしを行い、その記録から、社宅街の生活文化に関するものを整理し、分析を行った。

本報告の構成は次の通りである。まず、別子銅山の社宅街の形成過程を概観し、鉱山労働者の生活や社宅街での生活文化に関する文献を整理する（2章）。続いて「別子往還道プロジェクト～記憶の継承・地域の絆～」事業の概要を紹介し、調査方法について述べる（3章）。そして、社宅街での暮らしの様子や人や物の往来を聞き取りの内容から記述していく（4章）。最後に、考察を行い、今後の課題について述べる（5章）。

## 2. 別子銅山社宅街の概要と生活史

### 2-1 別子銅山社宅街の形成とその変遷

別子銅山は元禄4年（1691）に開坑し、昭和48年（1973）に閉山となった。その間、鉱山町の形成は鉱床の位置や中心事業地の変遷と連動している。

当初は、採掘拠点であった海拔1200mの谷筋に展開された。明治時代に入り、事業の近代化によって「採鉱と製錬が別々に実施できるようになったので、別子山中の採鉱を中心とした鉱山町と、臨海部の製錬を中心とした鉱山町に分かれて発展した」（新居浜市、2010、p.3）。同時に、山から海への運搬路も整備された。「明治26年に上部鉄道、下部鉄道を建設、両者をケーブ

ル（筆者注：索道）で結び、沿線に沿って事業を展開、駅も設けて、鉱石だけではなく人も運んだ」（社宅研究会、2009、p.170）。こうして山中の東延で行っていた銅山の事業は、四国山脈を越えた東平、海辺の新居浜、そして瀬戸内海の四阪島（しさがじま）まで展開され、この過程で各地に社宅街が建設された（社宅研究会、2009、p.170）。

続いて本稿で中心的なテーマとなる、東平地域と鹿森社宅について概要を述べる（図1）。東平地域は、標高約750m前後の山中に位置する職住一体の鉱山集落である（山村文化研究会、1999.11、p.1）。この地域は、明治35年（1902）に第三通洞が貫通したことにより開発が始まった。明治38年（1905）に東平選鉱場が完成すると、採鉱、選鉱や運搬の為に人員増加が必要となり、社宅も増えた。最盛期には約3800人の人々（銅山関係者とその家族）が住み、賑わった<sup>2)</sup>。学校や病院はもちろん、娯楽場・接待館等も建設された。しかしながら、昭和43年（1968）、終掘に伴う撤退により集落も閉鎖された（山村研究会、1999.11、p.2）。

鹿森社宅は端出場地域にある社宅で、標高約250～330mに位置する<sup>6)</sup>。端出場地域は、第四通洞・大立坑の開通により、大正期に入ると運搬拠点として栄えた。これに伴い職員<sup>4)</sup>用の打除社宅と鉱夫用の鹿森社宅が建設された（新居浜市、2010、p.14）。鹿森社宅は大正5年（1916）に建設が始まり、大正7年に完成した。最盛期には約300戸、1300人の生活があり、浴場・倶楽部・小学校があった。しかしながら、鹿森社宅も事業の撤退に伴い、昭和45年（1970）に閉鎖された<sup>6)</sup>。

## 2-2 別子銅山事業を基軸とした新居浜地域の人や物の往来

社宅は、採鉱本部、運搬路である通洞や斜坑の付近に形成される。上述の通り、中心事業地が山から海へと推移していくのに付随して、社宅街も山から海までの間に建設・拡大されていった。こうしてみると新居浜地域には、別子銅山から瀬戸内海へと南北に通ずるルートが存在し、事業拠点付近に社宅街が形成され生活が営まれていたと考えることができる（図1）。

また、東西には高松まで通ずる旧金毘羅街道が走っていた。南北のルートとの交錯地点には喜光地（きこうち）という境界が存在し、江戸時代から街道に沿って店が立ち並び賑わっていた。昭和初期には劇場、お茶屋、呉服屋、映画館などがあった<sup>6)</sup>。その後、鷲尾勘解治（かみざじ）や白石誉二郎（たかじろう）の尽力<sup>7)</sup>により海側に昭和通りが開発されると、この昭和通りも中心市街地として賑わうようになった。その他に、産業という観点から新居浜地域の産業をみてみると、農業や漁業の他、多喜浜（たきはま）の塩田事業、広瀬家の製茶・養蚕事業といった産業も存在した。

以上、別子銅山の南北のルートを基軸としつつも、喜光地境界、昭和通りといった中心市街地が存在し、さらに銅山事業以外にも他の産業が存在していたことを踏まえると、新居浜地域には南北東西に多くの人や物の往来が存在していたのではないかと考えられる（図1）。



図1. 社宅群の位置と商店が軒を連ねた昭和通り、喜光地境界の位置。（新居浜市、2010、p.3）（社宅研究会、2009、p.167）をもとに筆者作成。なお、この地図そのものは、明治40年の別子銅山操業地図である。

## 2-3 先行研究からみる山間部社宅街の生活

社宅街の形成は、企業の合理性の精神、労務管理や福利厚生といった、従来の鉱山集落とは明らかに異なる思想の影響を受けている。それ故、社宅街は計画的に整備され、多くの福利厚生施設が建設された。この点、先進的な取り組みであったと評価されている。また、幹部社宅と労働者社宅とで区域が分かれているという特徴もある（社宅研究会、2009）。別子銅山も例外ではなく、山間部の社宅街に娯楽施設や共同浴場、学校が作られた。後には、都市建設の一環として優れた幹部用社宅も作られた（砂本、1999）（新居浜市、2010、pp.17-23）。

このような特徴を有する生活環境の中で、人々はどうのように生活していたのか。この点について、別子銅山の東平地域における坑内労働者を対象に、坑内での労働や社宅街での暮らしの様子について聞き取りを行ったものとして松本（1989）がある。これによると、まず鉱山に勤める労働者の多くが、もともとは四国の山間部に住む農民であり、鉱山に転職する主な理由は、生活苦にあった。それから、坑内での労働は非常に過酷であり、危険であった。そのため、社宅街での生活は他の地域とは異なる雰囲気醸成され、現実の生活にも影響を与えていた。例えば、縁起を担ぐ、不吉な現象を嫌う（出勤時の家庭内の口論、物が割れる等）傾向があった。また、職員と鉱夫とでは待遇が異なっていたという。ただ、集落の者は皆、助け合って生活し、強い連帯の精神をもっていたという。

次に座談会形式で、生活経験者が東平地域、鹿森社宅での生活の様子を回想した（山村研究会、1999.8、pp.25-47）、（山村研究会、1998.11、pp.1-28）がある。両文献は、座談会形式で、日用品や食料、共同浴場、診療所、保育所、娯楽や行事、子供の

遊びの様子、長屋の間取りや自治会の活動などについて回想している。また、松本（1989）と同様、助け合って生活し、仲が良かったと回想している。

上記文献からわかることは、山間部の社宅街の生活文化には様々な要素が内包されていることである。例えば、先進的な福利厚生施設が建設され、索道等を利用して定期的に日用品や食料が運搬されていたという事実から、(1) 山間部といえども社宅での生活は、当時の平均的な生活水準に比べると恵まれているということがわかる。他方、生活苦から農民が職を求めて鉱山に集まってきたこと、彼らが過酷で危険な労働に従事し、職員と鉱夫とでは待遇が異なり、階層意識が形成されていたという事実は、仮に近代的な西洋思想のもとで社宅街が建設され、恵まれていたと評価できるとしたとしてもなお、(2) 人々の暮らしは厳しく、また貧しいものであったという厳然たる事実を提示し、生活様式に影響を与えていたことを示唆する。だからこそ、そこで暮らす人々は、(3) 連帯の精神が強く、助け合って生活していたのであろう。

### 3. 事業の概要と分析方法

#### 3-1 別子往還道プロジェクト～記憶の継承・地域の絆事業～

2010年度NPOによる文化財建造物活用モデル事業として「別子往還道プロジェクト～記憶の継承・地域の絆～事業」が、新居浜市内のまちづくり団体・えんとつ山倶楽部と新居浜市別子銅山文化遺産課の協働で行われた<sup>8)</sup>。

この事業は毎回、特定のテーマを設けて、そのテーマに所縁のあるゲストスピーカーを招き、昭和年代の写真や資料を見ながら、思い出や記憶を語ってもらうものである（図2）。

形式は各回によって異なる。基本的には、最初にゲストスピーカーに話をしてもらい、その後に質疑応答が行われるという形式であるが、参加者も会話に参加して構わない。2010年度7月～12月にかけて計8回のワークショップが行われた（表1）<sup>9)</sup>。

この事業の意義・目的は、都市計画、産業遺産を活用したまちづくり、地域コミュニティの維持、再生、まちづくり団体や市との協働事業の実践など多岐にわたる<sup>10)</sup>。

特に「別子往還道プロジェクト」という名前は、別子銅山事業の南北のルートのことを新居浜地域の人々が「往還」と呼んでいたことに着目して付けられている。この「往還」をまちづくり、あるいは都市計画に活かしていくという狙いがこの事業にはある。そのため、各ワークショップのテーマは、このプロジェクトの狙いに即して設定されている（表1）。

#### 3-2 分析方法

報告者は、ワークショップでの発言をICレコーダーで録音し、テープ起こし原稿を作成した。そして、このテープ起こし原稿を内容ごとに小分けして、小見出し及びキーワードを付し、一覧表として表作成ソフトに入力した（177個）。そして、①社宅、②生活、③往来・輸送、④学校、⑤仕事、⑥娯楽・遊びという内容コードを作成し、該当を1、非該当を0として内容分類した。このうち、①社宅（89個）に該当する部分の中から、東平

地域と鹿森社宅の生活に関連する会話を取り上げて、整理・分析した。

表1. 事業の実施概要（筆者作成）

	テーマ	実施日	場所
第1回	星越・山田社宅	7月24日	山田社宅内
第2回	昭和通り界限	8月6日	まちづくり協働オフィス
第3回	角野・山根界限	8月28日	角野公民館
第4回	立川・東平界限	9月11日	立川自治会館
第5回	鹿森社宅	9月25日	角野公民館
第6回	喜光地界限	10月5日	宮喜自治会館
第7回	広瀬家とお茶事業	11月20日	広瀬幸平記念館
第8回	端出場選鉱場	11月23日	個人宅



図2. ワークショップの様子。拡大された古い地図や昭和年代の写真を見ながら記憶をたどる。（第1回 星越・山田社宅：筆者撮影）

### 4. 事業記録からみる東平地域・鹿森社宅の生活

本章は、東平地域・鹿森社宅での暮らしの様子や人や物の往来を聞き取りの内容から記述していく。

#### 4-1 鹿森社宅の生活の様子

鹿森社宅の戸数は275前後であり、人口は多い時で約1400人程度いた<sup>11)</sup>。家族構成は夫婦と子供4、5人が基本で、子供は多い所で7、8人いた。間取りは基本的に各家同じであり、入口には竈が二つと上り框がある。左側に3畳の部屋、中央に4畳半の部屋があった（ただし、支柱夫が住む支柱長屋の場合は4畳半が二つ）<sup>12)</sup>。家族の人数が多い場合は、天井と押入れの間の空間を上手く利用して、子供3人くらい入れるスペースとして活用することもあった。部屋の下には、食糧貯蔵の為の穴があり、“いもつぼ”と呼んでいた。また鹿森社宅の終期には、石垣までのスペースに差出をつかって部屋を広くする家庭もあった。社宅の住人が減っていく頃には、二戸を借りて一戸として使用することもあった。そして、各世帯に約20㎡程の畑が付いていて、その畑で野菜などを栽培して食料の足しにしていた。

各家に風呂はなく共同浴場を利用していた。この共同浴場は倶楽部と共に、鹿森社宅の中心に存在していた。倶楽部は、集会所、娯楽施設、選挙の投票所等として機能していた。また、保育所が倶楽部の一階にあった。



教育施設としては、東平小学校の鹿森分校があり小学校3年まで通った。小学4年生になると、山根にある角野小学校に鉾山鉄道（後にバス）で通学した。集団登下校ということもあり、仲が良く、また団結が強かったという。この分校の隣には小さな運動場があり、様々な場面で活用された。例えば、青年団は、集落対抗の運動会の為に、高跳びや長距離の練習の為に運動場を利用した。

生活にとって重要な施設として生活協同組合（生協）があった。当初、配給所は端出場にしかなかった。そこで、鹿森の住民は、会社に配給所の建設を頼んだが、断られたという。そこで住民らは各々1000円を出しあい生協をつくった。後には、生協の近くまで物資を運搬する索道が通った。こうして生活物資は、生協あるいは端出場の配給所から入手していたと考えられる。

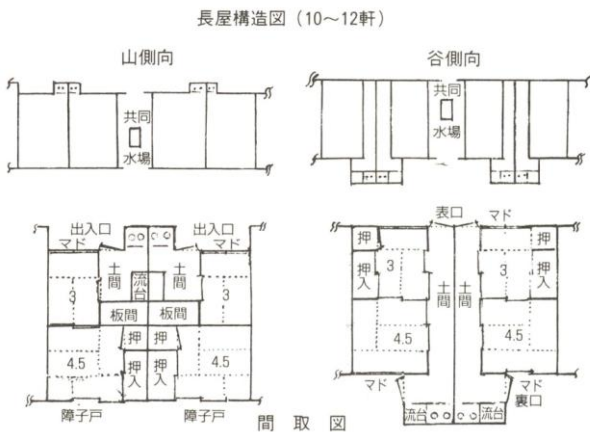


図3. 鹿森社宅の間取り図（山村研究会「端出場」及び鉾山集落「鹿森」での生活」山村文化16号、p.30(1999.8)

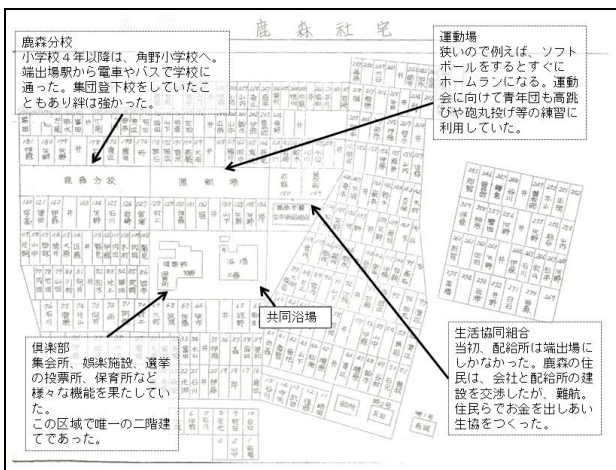


図4. 鹿森社宅の住宅地図と主な施設（昭和30年代の住宅地図より筆者作成）

4-2 強い相互扶助の意識

山の斜面につくられた社宅街は、他地域から隔離されているという特徴を持つ。また、鉾夫というのは四国を中心に各地から集まっていて、その中には、十分生活できないという事情から別子銅山に来ている人も含まれていた。「皆が助け合わないと

生きていけない。だから団結心が強い。一心同体」という気持ちが強かったという。このことは鹿森社宅・東平地域いずれの居住経験者も語っている。例えば、「他人でも兄さん、姉さんと呼び合っていた」。共同浴場では「赤ちゃんを連れてくる人でも、お風呂からでたら知らない人でもちゃんと着せてくれる」「よそのおじさんが黙って背中を流してくれる。体を洗ってくれる。」という。また「男の人が働いている時間、食料や荷物の上げ下げをするのは女性。往復で一時間以上かかる。そんな時、子供は別のだれかが子守をしてくれた。」「皆でお金を出し合って生協をつくった。それでも足りない分は、無利子で貸してくれた。」「食料は、共同の水場で冷やしている。だから誰が何を買ったかも一目瞭然である。例えば、スイカを買った時、自分達だけで食べるのにはためらいがある。そういうこともあって何か買ったら近所の子供たちにも分け合うのが普通であった。」

このように相互扶助や団結心を示すエピソードが数多く語られていた。昭和10年に生まれ、20歳まで鹿森社宅で生活したというAさん（70代・男性）は次のように説明する。

A: あとこれはね、鹿森でも、東平でも、どこでもそうだろうけども、鹿森、僕ら鹿森しか記憶ないですけども、なんでかこう一、こう一致団結できたゆうのはね、この地の人じゃなくてほとんど、あの一徳島とか高知とかそれも山間の人ですよ。そうゆう生まれ在り所であの、充分生活ができへん人がですね、職を求めてここいったいへんの集まるでしょ。で、ものすごい団結心とそのつおいし、みんなが助け合わんと生きてゆけんですよ、こうゆうとこでは、まったく隔離された部落ですから。だけん、自分の我だけ通しても生きていかへんし、いっばい何事も協力せん（後略）。

（第5回 鹿森社宅）

4-3 鹿森社宅における労働者としての意識—下財場の子—

別子銅山には、山田社宅という幹部用社宅が昭和初期に作られ、傭人（ようにん）社宅と呼ばれていた。それに対して、鹿森社宅は鉾夫用社宅であり、自分達が「下財場（げざいば）」の人間であるという、すなわち「傭人ではない」という意識が形成されていたという。鹿森社宅での生活経験者であるBさん（60代・男性）は、自身が「下財場」の子であるという意識について、次のように語る。なお、C、Dは一般参加者である。

B: だから、此処は傭人社宅と一般にいう。山田社宅というよりか。ま、此処はいいけど。前田社宅もそうですよ。  
 C: そうですね。  
 B: 傭人社宅といいます。ほで、私が育った鹿森とかね。新田社宅がなんて言うか分かりますか？これなかなか今つこたらいかんみたいな言葉「げざいば」というんです。  
 C: それは初めて聞きました。  
 B: 下の財産の財に場所の場。下財場の子いうんです。僕らみたいなん。  
 D: 年輩の人はね、

B：言うでしょ。

D：言いますけどね。まあ地下資源をね、掘る人じゃったから立派な鉱夫さんですよと私は言うんですけどね。思われる方にはね、色々あるようですがまあ。

B：でも、私は、実際こっち（山田社宅に）みたいに住んでないんじゃないし、（鹿森社宅に）住んどったですからね。「下財場の子は文句言うな」いうて。ほやきん、あの一、（中略）やっぱりどの世界入っても、人間いうのは、わしの方が上じゃいうのを言いたい人がおるんですよ。

D：ああなるほどね。

B：ほやきん、あの同じ工員仲間で皆、坑内入って同じ仕事しとるでしょ。次思う事は何か分かりますか？自分の子はえらなって欲しいと。でうちのおふくろは、\*\*ぼう（Bの呼称）は猛勉強して偉なれね。お父ちゃんみたいななんだったらいかんぞと。

D：ンフフフフ（笑）

B：口では言わんけどそうよ。「十把一絡げの、工具になつたんではいかんぞ」と。で、よそから言われる時は、「下財場の子いうて後ろ指差されるような事はすな。」物盗んだり、ね。ほやけん、下財場いうのはあんまりいい印象は無い。こっちは、傭人さんの子。

（第1回 星越・山田社宅）

#### 4-4 半自給的生活・恵まれた生活

鹿森社宅では、戦後の食糧難の時代に、森を伐採して段々畑が作られた。そこではさつまいも、とうきび（とうもろこし）、大根などが食料として栽培された。また、山に入って、食べ物例えば、山栗、松茸、たしぼ、野いちごなどを取りに行った。焚きつけのための枯れ枝や板葉も取りに行った。当然、自生する場所も把握していた。さらには、茶葉も摘み、家々で茶揉みなどの作業も行ってた。「子供のころ、夜にもろ蓋の上で、お茶を揉む手伝いをさせられる。爪の間が紫色になって、次の日学校に行くと、恥ずかしくて隠した」<sup>(13)</sup>という。食べ物だけでなく、東平の社宅では、工作課がストーブや掘りごたつ、かんじきも手作りして各家庭で使用していた。このように、東平や鹿森では半自給的な生活をしていたことが伺える。

他方、東平地区では、生活必需品の多く（肉や魚などは除く）が索道で運搬され、配給所で販売されていた。配給所で野菜や肉、魚、菓子などが売られ、特に生活に不自由したということはない。また、街の呉服屋や小間物屋が店開きする日があって、その時はみんなで見に行ったという。そして、第2章で述べたように、東平には学校・病院・娯楽場・接待館といった福利厚生施設が存在した。この点も考慮すれば、山間部の暮らしといえども、恵まれた生活を送っていたと評価できる。

#### 4-5 厳しい仕事

鉱山の仕事は、文字通り命がけの仕事である。それを示すエピソードとして鉱山鉄道の機関士の話と、鹿森の共同浴場で見た、鉱夫の裸姿の記憶を紹介したい。

鉱山鉄道で運転手をしていたEさん（80代・男性）は、「仕事

前に一日の安全運転を祈願し、帰りには、無事故を感謝するという気持ちの繰り返しだった。」と回想する。鉱山鉄道は時に急斜面、急カーブを進む。下りが急でカーブがきつい所は特に大変である。電化する前の照明灯はカンテラで暗く、しかも煙で燻っている。だから、前方が良く見えない。もし大きな石や障害物があれば、銅鉱石を乗せた貨車<sup>(14)</sup>が全て落ちてしまう。だから夜間は特に慎重に運行する必要があった。以下に示すのは、Eさんが早朝、朝一番の汽車の為に、車掌と二人で宿泊する際に、緊張してなかなか寝れず、早く寝るためにお酒をたしなんだというエピソードである。

E：（前略）ほで、車掌と一、機関士と二人だけで宿泊するわけなんですよ。で朝一番の汽車を一、あの一山根から、あの一坑内に入る人も、客車乗せて運転……。でまた一あの鹿森あたりから、下の方へ行く人もた一くさんいて……。ほんですよですけどね。あの一車掌と機関士ととまってるでしょ？朝早く起きないかんのにね。で我々はもう一、その運転して命がけの仕事しよるですよ。神経つこうとんのに。寝れんのですよ。困ったね。で今あの、南高<sup>(15)</sup>の入口の所に酒屋さんありますからね？（中略）あそこの酒屋にね一端出場から帰ってきたら、飛んで行って、一杯やるんですよ。ほんで、いっぱいやって車掌より先に寝ることじゃーと思うてね。（後略）

（第3回 角野・山根界限）

それから、共同浴場にいった時、ある鉱夫の体が傷だらけであり、しかもその傷がふやけて大きくなってたという子供の頃の記憶を前述のBさん（60代・男性）はこう語る<sup>(16)</sup>。なお、発話者のA、F、Hさんいずれも男性で鹿森社宅での生活経験者である。

B：（前略）あの一、僕はやっぱりびっくりするのは、坑内夫の人、（中略）、お風呂へ来るでしょ、四時から八時までです、お風呂は、ほで、普段のときはあんまり見ないけど……。着とるとき見たらね、体中“びす”あるんですよ。

F：あーそういやあったねー。

B：そうりやすごいびすがあるんですよ。

G：びす？

B：うん、びすゆうて傷の。だから裸になったら、やくざでもたまげるんじゃないかな。

A：ああゆうふうな刀傷みたいないの。

B：ほうすごいですね、背中から。

A：鉱石で石で切って。

B：みな、ほやきん、うす、薄着なんだろ？あの中は。

A：裸じゃ。

H：裸じゃ。

B：ほんでそれで鉱石がとんがとるでしょ。ほい、切る、ふやけた上で切るからもう、傷口が大きくなるんでし

ようね。(後略)

(第5回 鹿森社宅)

#### 4-6 娯楽・運動

生活には娯楽が必要である。それは大人も子供も変わらない。社宅街には娯楽・慰安施設があった。例えば東平には娯楽場があり、活動写真や浪曲師や楽団などが巡回で公演を行っていた。

人々が特に楽しみにしていたのが、住民対抗の運動会で、その日は、家族で出かけたという。山間部の集落の為、運動場の面積が狭く、例えば鹿森での運動会の場合、リレーをするときは1周70メートル、直線部分は20メートルあるかないか程であり、足の速さと言うより、カーブの曲がり方で勝負が決まっていた。

身体能力の点では、鹿森や東平と言った山間部で暮らしていた人は平野部で暮らす住民からすると足腰が強く、運動神経が良かったようだ。例えば、鹿森社宅の青年団は集落対抗の運動会やソフトボール大会や相撲大会などで好成績を収めていた。また東平地域には、小さいながらもプールがあり、水泳もすることができた。例えば、東平の社宅で小学校1年生から5年生までを過ごしたIさん(60代・女性)は以下のように語る。

I: あたしも女の子だったんですけど、あの一、(東平では)みんな気取らないで生活してますからね。こっち(角野)に降りてきてから、あのソフトボールなんか出ちゃうと、もうホームランなんですよね(笑)。(中略)女の子ってなんかおしとやかにしてなきゃいけない・街の子たちはそうなんですけど。でも一笑われるぐらいホームランでした。ふっふっふ(笑)。

(第4回 立川・東平界限)

その他、家族では、例えば籠(かご)電車に乗って旧別子方面にピクニックに行き、秋には紅葉、春には桜を楽しんだ。また野いちごを摘んで、帰りにコンデンスミルクを買って食べたという話もあった。

子供らは、野いちごを取りに行ったり、つたを利用してハンモックをつくったり、隠れ家をつくったりする等、「アウトドアを満喫していた」。例えば、東平では、冬には雪が降るので竹でスキーをつくって、ストックなしで滑って遊んでいた。また、東平地区でも鹿森地区でも年に一度、青年団の主催で、泊りがけで新居浜に海水浴にいき楽しみであった。

ユニークなのが、花火のエピソードである。東平には、一の森(いちのもり)という場所があり、そこから新居浜を見渡すことができ、新居浜の花火大会も、一の森に上がって見たという。以下に示すのはIさん(60代・女性)がその母親であるJさん(80代・女性)、参加者のKさん(60代・男性)と遠花火を回想する会話文である。

J: (前略) 新居浜の花火大会なんて、一の森にあがってね。

I: そうですね。

J: した、上から。はい。遥か彼方で花火が、鳴るのをねー

I: 遠花火をね、見ますでしょ?

K: ああ

I: あの一の森のその大山積神社の裏手から見えるんですね。

K: ええ見えますわね。

I: であそこ何秒か忘れたけれども、子供心に数えてて

J: いつも数えてました。

I: 15か6か20だったか。何秒かその音の速さで。何キロあるんでしょうね。

(中略)

I: あの音が本当にもう遅れて聞こえるのが、なんか、すごく奇妙(笑)であるし、ええ面白がってましたね。

(第4回 立川・東平界限)

#### 4-7 人や物の往来

人や物の往来に関するエピソードや会話も多い。本節では、社宅にまつわるものの一部を紹介する。

前述のように、活動写真(映画)や演芸集団が、別子銅山の社宅街を巡回して公演していた。鹿森社宅の子供らは、集団で角野小学校まで鉱山鉄道あるいはバスで通学した。その鉱山鉄道の機関士は、前々節で紹介したように、命がけて銅鉱石を運搬していた。そんな中、山根から端出場まで子供らを運転席の中へ隠して乗せてくれる運転手もいたという。運賃を請求することもなく、「ほれ、ここのれよーのれよー」と乗せてくれたという。

なお、輸送手段については、既にみた鉱山鉄道、籠電車のほか、鉱石を運ぶ索道を利用した荷物の移送、馬車や木炭バス、電気バス、ガソリンバスなど昭和年代だけでもバラエティに富み、かつ変遷があった。例えば、新居浜には馬車曳きがいて、荷馬車が通ったあとは、道に馬糞が落ちていたという。

それから、年に1度、住友の福利厚生事業として山根グラウンドで社員家族をも招いて運動会が行われていた(親友会)。ここでは、子供でも、鉛筆や醤油等の景品をくれた。だから、例えば昭和通り界限に住んでいる子供も歩いて山根グラウンドまで行ったという。また親友会に参加すると劇場の無料チケット等も配られ、いわば街中でどこでも劇場に入れた。

当時、中心市街地の一つであった喜光地界限との関わりも深い。例えば、喜光地には料亭兼旅館が複数あり、鉱山の社員も宴会などで利用していたという。また、喜光地の呉服屋を営むLさん(60代・男性)は、売掛金の回収の為に、東平や筏津(いかだづ)方面まで出かけた思い出を次の様に語る。

L: 卒業して、昭和42年に帰ってきたんですけど、帰ってきたとき月末だったかなあ、うちに男の丁稚が何人かいたんですけど、必ず東平とかの方へ集金に連れて行って一、夜怖い一思いながらね(笑)、だから、かなり一あっちから社宅の方買いに降りてこられた。新田くらいだったら近くていいんですけどね。奥の筏津とか、あっち行った記憶がありますね。

(第6回 喜光地界限)

本章第4節で述べたように、東平では呉服屋や小間物屋が店開きをする日があった。こうしてみると新居浜の社宅街と中心界隈である喜光地との間にも人や物の往来があったといえる。

## 5. おわりに

### 5-1 考察

本報告では、2010年度に行われた「別子往還道プロジェクト～記憶の継承・地域の絆～」事業の概要を紹介し、事業での記録をもとに、昭和期における別子銅山社宅街（東平・鹿森）を中心とした新居浜地域での生活文化を記述してきた。

先行研究が示す（1）山間部といえども社宅街ならではの恵まれた生活、（2）貧しい暮らし・厳しい仕事及びそれらに影響を受けた生活様式、（3）強い連帯の精神といった要素は、本稿においても同様であり、危険な仕事で、貧しい生活の中、相互扶助の精神のもと、助け合って生活していたことがわかった。

ただ、生活という観点からは、必ずしも厳しい毎日だけではなく、人や物の往来があり、日用品に不自由していたということもなかった。人々は現実を受容し、娯楽や運動を通じて生活を楽しんでいたことが窺える。そして山間部社宅街での生活には、労働者が危険な仕事に従事した人々も厳しい生活をしてきたが故の“大らかさ”や“寛容の精神”が存在していたこともまた窺えるのである。

このように、本報告は「社宅やそれが作りだす街は、生きられた空間として、はるかに多様な要素を内部に抱えている」（社宅街研究会、2009、p.232）ことを生活者の証言からも示すことができたと思う。この点、本稿の報告意義があると思う。

### 5-2 記憶の継承事業の意義

本事業のワークショップは、中心的な話者を軸としつつ、参加者も自由に議論に参加できる方式であった。それゆえ、話題がテーマとそれと進むことも多々あったが、時に思いがけない興味深い話を聞くことも出来た。複数人が他愛のない会話を進めていくことで様々な記憶を引き出していく場面に多く遭遇したことは筆者にとって驚きであった。本報告の成果は、こうした緩やかに行われたワークショップのお陰である。

また、本事業は、任意のまちづくり団体と市役所による協力によって行われている。高度経済成長期が終焉し、各地の鉱山や炭鉱も閉山しており、衰退の途をたどっているが、新居浜も例外ではない。我が国の産業構造は変化を迫られ、地方自治体の経営の在り方も見直しを迫られている。率直に言って大幅な増収増加や国からの補助が期待できない中、各地域は持続可能な自助・共助のシステムを再構築していかなければならないという課題を有している。こうした文脈においてこの事業の試みは、市民活動団体が主体となって、産業遺産を活かしたまちづくり、市民による歴史作り、コミュニティの維持再生を企図している点において評価される試みではないかと考えられる。

### 5-3 課題

まず、新居浜に存在する社宅は山田、前田、新田、四阪島な

ど、他にも存在する。この点、本報告は、別子銅山社宅街の昭和の生活史全体を明らかにするまでには至っていない。今後は他の社宅街での生活史についても調査していく必要があると考えられる。

また、本報告は、東平地域と鹿森社宅それぞれ数名からの聞き取りをもとに記述しているが、それが鹿森社宅あるいは東平地域の生活文化の全体的な特徴を示しているかどうかについては定かではない。例えば、東平地域といっても複数の社宅が存在している（例えば呉木（くれき）、辻坂（すべりざか））し、鉱夫用の社宅と傭人社宅とでは生活環境が異なっており、生活文化にも差異が存在すると考えられる。この点、可能な限り、更なる聞き取りを進めていくことが必要であろう。

### 謝辞

本稿は、2010年度に行われた「別子往還道プロジェクト～記憶の継承・地域の絆～」事業に参加しなければ出来なかった。この点、事業の企画・実施者である株式会社リージョナルデザイン安孫子尚正氏、えんとつ山倶楽部の関係者の皆さま（直野菅男氏、薦田陽之介氏、妻鳥俊彦氏、大條雅久氏、直野由美子氏）、新居浜市別子銅山文化遺産課の横井邦明氏、加藤大和氏、本事業に文化財建造物活用モデル事業として助成して下さった文化庁に厚く御礼申し上げます。また、えんとつ山倶楽部の取り組みを紹介して下さった新居浜工業高等専門学校の吉川貴士教授、新居浜の歴史等について丁寧に教えていただいた河野義隆先生、ライフストーリーの方法論、実際の聞き取りや記録の取り方についてご助言頂いた松山大学の山田富秋教授にも御礼申し上げます。それから、論文に目を通して下さり、史実の確認やコメントをしていただいた曾我幸弘氏、山川静雄氏、新居浜市まちづくり協働オフィスの関係者の皆さま、トランスクリプション作成に協力してくれた足高寛美、ワークショップの撮影に協力してくれた新居浜工業高等専門学校映像研究会の学生にも御礼申し上げます。最後に、事業で貴重なお話を頂いたゲストスピーカーの皆さまと参加者の方に御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

### 脚注

- ①本稿における新居浜地域とは、現在の新居浜市域と定義する。もともと別子銅山は幕府の直轄領であり、現在の新居浜市域の大部分を領有していたのは西条藩であった。昭和12年に新居浜は市制に移行したが、旧別子や東平地域は新居浜市に含まれておらず、別子山村あるいは角野町という行政区画であったことに注意されたい。その後、次々と町村が編入し新居浜市の面積は拡大した。そして2003年に別子山村が編入し、現在の新居浜市域となっている。行政区画の変遷については新居浜市編「新居浜市史」（1980）を参照のこと。
- ②最盛期の人数についてはマイントピア別子発行のパンフレットによる。
- ③標高については、山村研究会「端出場」及び鉱山集落「鹿森」での生活」山村文化16号、pp.25-47（1999.8）における記述と、国土地理院の地図閲覧サービス（<http://watchizu.gsi.go.jp/>）より

推測した。

- (4) 本稿において、「職員」は「幹部」、「傭人(ようにん)」「傭員」と同義とする。「労働者」は幹部以外の労働者を想定しており、「鉱夫」、「坑夫」も労働者に含まれることとする。
- (5) 年数や戸数については山川静雄「蘇った「鹿森」」山村文化 23 号、pp.30-37 (2001.5) を参照のこと。
- (6) 喜光地商店街作成のパンフレット「心の原風景を訪ねて」、高橋達雄「続喜光地の芝居小屋界限」新居浜史談 274 号、pp.3-7 (1998.6)、「喜光地の芝居小屋界限」新居浜史談 273 号、pp.9-10 (1998.5)、「昭和五年頃の喜光地(北部)」新居浜史談 286 号、pp.51-54 (1999.6)、「昭和五年頃の喜光地(西部)」新居浜史談 297 号、pp.28-31 (2000.5) を参照した。
- (7) 鷺尾勘解治(1881-1981)は昭和2年10月に住友別子鉱山株式会社最高責任者に就任すると、別子銅山の鉱量調査を実施、別子銅山は「末期の経営」であることを公表した。その後、鷺尾は、銅山なき後の新居浜の後栄(繁栄)策として新居浜築港、工業用地の造成、道路整備、都市計画の策定等を提言した。この計画は規模の大きさを反対の声も多かったが、当時の新居浜町長・白石誉二郎(1874-1951)は、この計画に賛同し、鷺尾が新居浜を去った後も、これを強力に推進した。昭和通りや山田社宅は、この計画に基づいてつくられた。(新居浜市広瀬歴史記念館編『別子銅山と近代化産業遺産—写真と絵図でたどる新居浜の19-20世紀—』p.29 (2000) 参照のこと)
- (8) この事業は、文化庁助成のNPOによる文化財建造物活用モデル事業として採択された。本件事業の趣旨や様子は、主催団体であるえんとつ山倶楽部のHPで詳しく紹介されている。  
<http://entotsuyama.com/beshi-oukando/beshi-oukando.html> (2011年9月13日閲覧)
- (9) 筆者は第2回と第6回は所用により参加できなかったが、トランスクリプションは作成した。
- (10) 安孫子尚正「地域コミュニティ再生が果たす近代化産業遺産まちづくり」  
<http://www.regional-design.co.jp/pdf/20110521.pdf> (2011年9月13日閲覧)
- (11) 最盛期の人口については、1300人から1500人と複数の見解があるようであるが、ここでは語られた内容をそのまま記述していることに注意。
- (12) 山村研究会「「端出場」及び鉱山集落「鹿森」での生活」山村文化 16 号、pp.25-47 (1999.8) によれば二つのパターンがあったようである。
- (13) 他の居住経験者の話によると、もろ蓋よりむしろを利用することの方が一般的であったようである。また紫色というより茶色に近いという意見もあった。ただし、本稿はあくまで、話者の語りを重視しているため、語られた内容をそのまま記述することにした。
- (14) Eさんの記憶によると、貨車の数は蒸気の際は十数台、電車の時代になると20台を超えたという。
- (15) 新居浜南高校(愛媛県新居浜市篠場町)
- (16) すべての鉱夫が傷だらけであったということではないことには注意されたい。鉱山での仕事の厳しさを物語るエピソードとして紹介している。

## 参考文献

- [1] 芥川三平「鹿森・大永探訪について(3)」新居浜史談 358 号、pp.6-15 (2005.6)
- [2] 伊藤玉男・山川静雄「別子鉱山端出場を探る3」山村文化 18 号、pp.1-11 (2000.2)
- [3] 愛媛大学別子山村総合研究グループ編「別子銅山と鉱業集落に関する総合研究—愛媛県別子山村の事例—」地域社会総合研究所研究報告 A シリーズ第 14 号 (1975)
- [4] 小林甫、中川勝雄、岩城完之「炭鉱労働者の生活史分析に関する一考察：労働者三層(職員・鉱員・組夫)の比較分析」北海道大学教育学部紀要 27 号、pp.31-87 (1976.3)
- [5] 崎山俊雄、飯淵康一、安原盛彦「大正初期の三菱鉱業における「労働者取扱方ニ関スル調査」と鉱夫住宅の改善—三菱系鉱山・炭坑における社宅経営に関する建築史的研究 その 2—」日本建築学会大会学術講演梗概集、pp.223-224 (2008.9)
- [6] 桜井厚『インタビューの社会学』せりか書房 (2002)
- [7] 山村研究会「「端出場」及び鉱山集落「鹿森」での生活」山村文化 16 号、pp.25-47 (1999.8)
- [8] 山村研究会「「東平」での生活文化探求」山村文化 17 号、pp.1-28 (1999.11)
- [9] 社宅研究会編著『社宅街 企業が育んだ住宅地』学芸出版社 (2009)
- [10] 砂本文彦「鷺尾勘解治と新居浜・住友山田団地について」日本建築学会計画系論文集第 519 号、pp.271-278 (1999.5)
- [11] 高橋達雄「続喜光地の芝居小屋界限」新居浜史談 274 号、pp.3-7 (1998.6)
- [12] 高橋達雄「喜光地の芝居小屋界限」新居浜史談 273 号、pp.9-10 (1998.5)
- [13] 高橋達雄「昭和五年頃の喜光地(北部)」新居浜史談 286 号、pp.51-54 (1999.6)
- [14] 高橋達雄「昭和五年頃の喜光地(西部)」新居浜史談 297 号、pp.28-31 (2000.5)
- [15] 高橋利光「山の町・東平(東平小学校をヒントにして)」山村文化 15 号、pp.15-20 (1999.5)
- [16] 武笠俊一「「問わず語り」の背後に潜むもの：『口述の生活史』成立の謎に迫る」人文論叢三重大学人文学部文化学科研究紀要第 26 号、pp.17-28 (2009)
- [17] 新居浜市企画部 別子銅山文化遺産課『別子銅山が育んだ山田社宅現況調査報告書』(2010)
- [18] 新居浜市広瀬歴史記念館編『別子銅山と近代化産業遺産—写真と絵図でたどる新居浜の19-20世紀—』(2000)
- [19] 西牟田真希「三池炭鉱における社宅コミュニティ」札幌学院大学社会情報 19 (2)、pp.219-223 (2010.3)
- [20] 松本通晴「鉱山労働者の生活史」庶民生活史研究会編『同時代人の生活史』未来社、pp.182-227 (1989)
- [21] 御厨貴編『オーラルヒストリー入門』岩波書店 (2007)
- [22] 山川静雄「蘇った「鹿森」」山村文化 23 号、pp.30-37 (2001.5)